



こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

【第10章】

岸岱代参『金光院日帳』より

奥書院障壁画を制作した岸岱についてみていこう

天明5年(1785)生まれ、元治2年(1865)没(81歳)。[天明2年(1782)出生とも]

本姓は佐伯。名は国章のち岱。字は君鎮、号は卓堂・同功館、紫水などと称した。岸駒の長男。白井華陽の『画乗要略』に「岸駒が厳しく教育したといわれその長所をよく学んでいる。山水・花鳥・人物をよくし、走獸画にいたっては並ぶものがないと賞せられた。」。岸派二代目として京都画壇において大きな勢力を築いた。文化5年(1808)従六位下筑前介、嘉永6年(1853)従五位下越前守に叙任¹⁾。



伝岸駒筆 虎之図 絹本着色 94.5×32.7(金刀比羅宮蔵)



岸駒筆 虎図 絹本着色 146.0×92.3 (図録「企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—」 栗東歴史民俗博物館 より転載)



伝岸駒筆 雲龍図 紙本墨画(金刀比羅宮蔵)
『金刀比羅宮絵馬鑑』金刀比羅宮社務所第一課、1927に次のように記される。
縦3尺7分 横4尺6分
[款]戊寅中夏□□□越□□岸駒
[楮書]奉納 文政元年戊寅九月十日 越後國蒲原郡嘉茂町明田川仁右衛門
[由緒]文政元年明田川仁右衛門献納



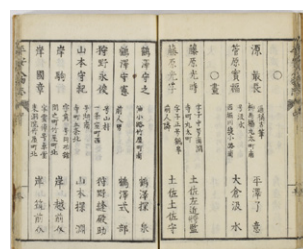
岸岱筆 巖上虎図 絹本着色 148.5×86.8 (滋賀県立琵琶湖文化館蔵)



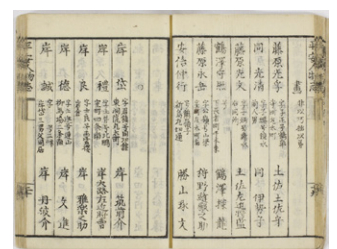
《扁額縮図》文久年間(1861~1864)8帖のうち「龍」(金刀比羅宮蔵)に描かれており、次のように記される。
竪三尺八寸 横四尺六寸
戊寅中夏写同功館
越前介岸駒
文政元年戊寅九月十日
越前國蒲原郡嘉茂町
明田川仁右衛門

『平安人物志』には文化10年版(1813)画の部、文政5年版(1822)画の部、文政13年版(1830)画の部・文雅の部、天保9年版(1838)画の部・文雅の部、嘉永5年版(1852)画の部・文雅の部の5度掲載される。

文化10年版(1813)をみると、画の部「岸国章 字雲偉号卓堂 東洞院竹屋町北 岸筑前介」、嘉永5年版(1852)には画の部「岸岱 字君鎮号同功館 東洞院丸太町 岸筑前介」文雅の部「岸岱」と記されている。



平安人物志(京都府立京都学・歴史館蔵) 文化10年版 画の部



嘉永5年版 画の部



また、安政3年(1856)『平安画家評判記』という役者人気番付に見立て、当時の京の画家を格付けしたものがある。岸岱は最上位の「無類 千両 市川海老蔵」と格付けされている²。

『奥書院修理工事報告書』所載の『金光院日帳』記事には「禁裏御絵師岸岱」「岸岱御代参」の記述がみられる。これだけでは誰の代参であるか分からないものの、土居氏、伊藤氏ともに有栖川宮の代参と指摘している³。

岸派は岸駒の代から有栖川宮に仕えて官位を得ており、様々な御用にに応じ出入りするなかで、公家との関係を深め勢力を伸ばしていた⁴。『有栖川宮総記』に「織仁親王の御遺筆は伝はらざるも、画家岸駒を勸まして名を成さしめられし思召の程はいとも畏し。爾来当宮と岸一派とは関係深く、其の弟子輩の門牆に伺候する者亦少からず。韶仁親王の絵事に堪能にあらせられしは、御遺墨に由りて明かなり。熾仁親王は家職岸昌岱に就きて学ばせらる。」とある。岸岱は文化6年(1809)元旦、有栖川宮家第6代織仁親王おりひとに伺候し家臣の列に加えられたという⁵。弘化2年(1845)2月26日つなひとに第7代韶仁親王が薨去されたため、岸岱に命じ描かせた御影像が6月4日、2幅出来上がり、1幅は客殿御仏間に掲げ、1幅は龍光院に納められた⁶。



岸岱筆 有栖川宮織仁親王像
紙本墨画淡彩 62.7×56.0
(富山市佐藤記念美術館蔵)



有栖川宮織仁親王像 文聚院宮
転載(『特別展 写された絵 遺された絵—岸駒・岸岱・岸派絵画資料をめぐる—』図録
(富山市佐藤記念美術館 2012年))



有栖川宮職仁親王像 本明円心院宮

金毘羅と禁裏や有栖川宮との関係をみていくと、元文元年(1736)禁裏御祈禱を申し付られ、以後、禁裏御祈禱を修法し朝廷との関係が恒常的なものへとなる。第9代別当宥弁(1737～1760)以降は九条家門流の猶子となり金光院へ入院することを通例とした。禁裏から御撫物が下されたころより、諸親王家をはじめ、青蓮院宮・有栖川宮・正親町家・烏丸家等から初穂の献上や代

参、祈祷依頼などが行われるようになり、諸公家、皇族、宮家との関係が深まっていった。そして宝暦3年(1753)には禁裏勅願所となる。第5代職仁親王よりひとは宝暦6年(1756)11月2日、邸内鎮守社に相殿として金毘羅権現を勧請した⁷。有栖川宮歴世は神祇の奉斎敬虔にして邸内の神霊奉祀厚く、各社を参詣し代参を差遣していた。その他御心願の事あるに際し職仁親王は讃岐金刀比羅社に祈祷を命じた⁸という。明和6年(1769)10月、讃岐金毘羅・住吉社・玉津島社等に平癒の御祈祷代参を遣わした⁹。明和9年(1772)7月2日、仙洞(後桜町上皇)が織仁親王の病氣平癒の御祈祷を願い出、金毘羅に西池修理が代参した¹⁰。文化14年(1817)6月24日、有栖川宮奥女中より神馬額奉納される¹¹。『文政五年金光院日帳』の文政5年(1822)6月4日の条に、有栖川宮より御初穂銀壹両、代参として脇平馬來社、記事中に「但し奥書院一見相頼為見候而早々被帰候事」¹²とある。文政6年(1823)3月14日、有栖川宮より御代参参向¹³。『金光院件名留』の天保11年(1840)5月朔日の条には「一、京都 有栖川宮様より御代参有之萬々取計之事。」¹⁴とある。このように有栖川宮とは岸岱、金毘羅共に関係性がみられる。

そして、『天保十五年金光院日帳』5月3日の条¹⁵に「一、筑前介岸岱義 有栖川宮御代参相兼罷越候ニ付其趣森藤恒右衛門より申出大門より小頭御案内為致候事」と記される。『奥書院修理工事報告書』所載の『金光院日帳』には省略されていた箇所、岸岱は有栖川宮の代参であることが確認できた。

『金刀比羅宮史料』14巻に『天保十五年金光院日帳』に記された岸岱一行の障壁画制作に関する記事を抜粋しているのでみていこう。

(四月二十三日ノ条)

(前略)御寺に而御賄之儀奥書院御造作中殊に御前御留守申談下宿札ノ前町登母屋申付候(後略)

(四月二十五日ノ条)

薄暑之節御座候得共愈御堅勝可被成御勤珍重奉存候於本坊御扱可申之所院主留守中且ハ書院造作中ニ付何卒御旅宿ニ而御緩々成被下様申述(後略)

(五月二日ノ条)

五月二日 雨天

当番

山下弥一兵衛

弥田七左衛門

一、禁裏御絵師岸岱昨夜丸亀着今朝迎人足拾人外ニ御仲間壹人申付遣候段森藤恒右衛門より申出候事



(五月三日の条)

五月三日 晴天

当番

弥田七左衛門

山下弥一兵衛

一、筑前介岸岱義 有栖川宮御代参相兼罷越候ニ付其趣
森藤恒右衛門より申出大門より小頭御案内為致候事

但御神前江も其段申遣置候事

一、岸岱御代参相勤下掛け御本坊江罷越七賢之間江通茶多
葉粉盆出し夫より直様御書院拜見之上御襖等相認申度様
ニいたし呉候様申出候事

但岸岱罷出弥田七左衛門出逢退出之節御玄関間迄
見送御取次式墓迄見送申候事

(五月十四日ノ条)

一、恒例之通奥柳之間御普請ニ付於上之間(後略)

(五月廿六日ノ條)

一、夜入五ツ半時益御機嫌克御帰院被遊候事

(五月廿九日ノ條)

京都絵師

岸岱

右之者より左之通献上ニ付及披露候事

玄鶴図

風鎮 壹箱

包昆布

(六月廿五日ノ条)

一、筑前之介岸岱明日登山致候ニ付御墓所御書院番申達候委
細明日之所記申候事

(六月廿六日の条)

一、禁裏御画師筑前之介岸岱最早奥御書院認呉相濟為御振
舞頃日案内いたし候所今日ハツ半時登被致候ニ付早速御
取次より虎之間江通茶多葉粉盆出し置用人御挨拶可申旨
御取次より申述置山下弥一兵衛出逢一ト通挨拶いたし先御
数寄屋江御通被下候様申述此方ニ而院主義も御挨拶可申
述置夫より御取次案内御数寄屋江通申候事

附門人有芳岸光兩人初鶴之間通置山下弥一兵衛挨拶
無程何れも一所御数寄屋江通申候事

一、御数寄屋ニ而茶多葉粉盆御生菓子指出置又々山下弥一兵
衛出逢院主御挨拶可申旨申述置 御前申上御出掛ニ相
成初而御逢之趣御申述次ニ書院御画見事出来大慶いたし
候趣且先達而被入御念鶴之画御贈忝段被仰述候是より御
料理差出候

御前御吸物壹ツ位被召上御盃相濟先寛々成被下候様御申
述御引取被遊候事

但有芳より

御前江色紙貳枚差上候ニ付山下弥一兵衛挨拶致置候事

硯蓋 壹ツ

吸物 貳ツ

鉢肴 五ツ

壹汁五菜

一、右之通御料理念入門人兩人相伴弥田七左衛門御取次替々
罷出取持いたし相濟薄茶差出

御前御暇乞御挨拶申述御引取次ニ左之通出候

金千疋

筑前之介岸岱

昆布包

門人

金貳百疋

有芳

昆布包

岸光

一、帰之節表広縁迄弥田七左衛門山下弥一兵衛見送り御取次
式墓被致候事

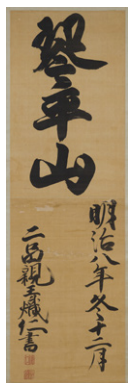
但草履取壹人溜り間ニ而支度被下候事

一帰之節山之字箱灯燈ニ而案内被致候事

これによると、天保15年(1844)4月23日、岸岱一行の下宿や賄は札ノ
前町の登母屋が手配されている。5月1日の夜に岸岱が丸亀に到着し、
5月2日、金毘羅より迎えが行く。5月3日、岸岱が有栖川宮の代参を勤め終
え御本坊へ来て七賢の間に通し、茶とたばこ盆を出した。そしてすぐに、
御書院(奥書院)を見て障壁画制作の申し出があったようだ。5月26日夜、
宥黙が帰院し、5月29日岸岱から玄鶴図、風鎮、包昆布が献上された。
6月26日には奥書院の障壁画が竣成した労をねぎらうため振舞を行って
いる。まず岸岱を虎の間へ通し、茶とたばこ盆を出し、御数寄屋で院主が
挨拶をするので数寄屋へ案内した。門人の有芳・岸光は、はじめ鶴の間
へ通され、ほどなくして数寄屋へ案内された。数寄屋にて御前(宥黙)と
はじめて面談し、御前は奥書院障壁画が見事な出来で喜ばれ、鶴の画
の御礼の挨拶をされた。次に料理を出してもなし、岸岱に金千疋と昆布
包、有芳に金貳百疋、岸光に昆布包が渡されたことが記されている。

明治以降も金刀比羅宮と有栖川宮の関係は続き、下記の奉納・
参拝などが記録されている¹⁶。

明治8年(1875)12月、熾仁親王御筆「琴平山」額字進納(「琴平
山」三字、「明治八年冬十二月二品親王熾仁
書」十五字の2枚進納。この御額字はこれを
彫刻して現に大門の楼上に掲揚す)



「琴平山」額字



明治11年(1878)3月、熾仁親王御筆「事比羅宮」額字(「事比羅宮」四字、「明治十一年三月陸軍大将二品親王熾仁謹書」十九字の2枚)、「賢木門」額字(「賢木門」3字、「明治十一年三月陸軍大将二品親王熾仁謹書」十九字の2枚)進納。(賢木門の御額字は彫刻の上現に賢木門へ掲揚す)



「賢木門」額字



明治15年(1882)4月1日、熾仁親王より金刀比羅崇敬教会統理として深見速雄、副統理・琴陵宥常、宮崎富成が補任された¹⁷

明治16年(1883)3月15日、宮司・深見速雄上京、有栖川宮に鯉節一箱・薩摩焼薄茶椀一箱差し上げ面会する¹⁸。

明治16年(1883)4月14日、熾仁親王より御銅鏡(桐竹菊花鳳凰文様)一面御寄附¹⁹

明治16年(1883)4月14日、熾仁親王より御太刀(肥前國忠吉作、白鞘)一振御寄附

明治17年(1884)7月6日、熾仁親王参拝

明治20年(1887)12月8日、熾仁親王参拝

明治23年(1890)4月16日、金刀比羅宮が創設と運営に取り組んだ「大日本帝國水難救済会」初代総裁に有栖川宮熾仁親王が就任

明治38年(1905)11月22日、裁仁王参拝

- 1 岸岱の伝記については、①「特別展 京都画壇岸派の展開」、⑥「企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—」から引用した
- 2 ⑩五十嵐公一「安政の御所造営と文久の修陵」pp.162-163
- 3 ⑨土居次義「讃岐金刀比羅宮の障壁画」p.9。⑤伊藤大輔「常若の絵画—金刀比羅宮の障壁画」p.24、両者ともに有栖川宮の代参とみている。
- 4 岸駒は天明4年(1784)に有栖川宮の御学問所の襖を描き雅楽助(うたのすけ)を賜る(④「織仁親王行実」pp.85-86)。
閑院宮、伏見宮、京極宮、鷹司閔白殿、二條殿、近衛殿といった御摂家の御用も数多く、その上、上長州、尾州、肥前、芸州、備前、備中、仙台、等々実に多くの武家からの需めにも応じている。(⑫佐々木丞平「岸駒の生涯と芸術」『企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—』pp.7-8)
- 5 ⑬「特別展 京都画壇岸派の展開—遺された絵—岸駒・岸岱・岸派絵画資料をめぐって—」p.80、図34解説 (④「織仁親王行実」p.268「六年正月元日、家臣一同の年賀を受けさせらるるに際して、岸筑前介量に家臣列座を許容せらる。筑前介は即ち岸雅楽介の子にして旧臘、雅楽介より御家来同様年始の御杯頂戴を願ひ出でしに依れり。」)
- 6 ⑤「韶仁親王行実」pp.201-202「六月四日岸筑前介^{岸岱}に命じて大功徳院宮の御影像を描かしめられしが、是日、二幅出来す。御影像は御直衣の御装にて、表装の天地は宮の御冬小直衣地を、中裂は妙勝定院宮の打掛を用ひ、御影開眼の後一幅は客殿御佛間に掲げ、一幅は龍光院に納めらる。」
- 7 ⑥「織仁親王行実」p.75「十一月二日、吉田二位^{岸岱}等参殿して、庭内鎮守社に相殿として金毘羅権現を勧請す。
⑩「金毘羅庶民信仰資料集 年表篇」p.82。
⑬「町史ことひら 3 近世・近代・現代 通史篇」pp.84-86
- 8 ⑦「有栖川宮総記」p.32
- 9 ⑥「織仁親王行実」p.169
- 10 ⑧大崎定一「こんぴら信仰史…三話」『こと比ら』19号、p.48。
『金刀比羅宮崇敬史』1巻、1923、pp.19-20
- 11 「金刀比羅宮史料」64巻「(六月廿五日の條)一、京有栖川宮様御内より左の通額奉納致度取次宿内町とらや茂兵衛より尊勝院江相頼今日神馬堂前へ為懸候尤請取書尊勝院神護院と右両院より指遣候事。有栖川宮御殿大奥御女中方。奉納御神馬。干時文化十四年丑年六月十五日。右額神馬と書有之候二付為かいは料金拾兩添上候事」。
⑩「金毘羅庶民信仰資料集 年表篇」に「文化14年6月24日有栖川宮奥女中より神馬額奉納。飼葉料十兩添え」とある。
『金刀比羅宮崇敬史』1巻「文化十四年 一、六月二十四日有栖川宮韶仁親王より御代参を参向せしめられ御額一面及金拾兩を御進納あらせらる。(象頭山志調中之廉書巻四、史料第四巻一六頁)」
- 12 「金刀比羅宮史料」15巻、p.89、『金刀比羅宮崇敬史』1巻、p.57
- 13 「金刀比羅宮史料」18巻、p.37。『金刀比羅宮崇敬史』1巻、p.57
- 14 「金刀比羅宮史料」29巻、p.44。『金刀比羅宮崇敬史』1巻、p.59「天保十一年 一、五月朔日、有栖川宮御代参として田中主水参向す(天保十一年子年四月二十四日ヨリ御用留日記二番。史料第八巻四四頁)」
- 15 「金刀比羅宮史料」14巻、p.8
- 16 「金刀比羅宮御由緒記」1913「第四章朝野崇敬第一節皇族御崇敬之事實」の頁。
『金刀比羅宮崇敬史』1巻
- 17 ⑭「黎明期の金刀比羅宮と琴陵宥常」pp.406-408。②「熾仁親王日記」巻中p.505
- 18 ③「熾仁親王日記」巻下p.132
- 19 ①「熾仁親王行実」p.302に「四月十六日讃岐金刀比羅宮へ神鏡一面を寄進せらる。」とある

参考文献

- ①「熾仁親王行実」高松宮蔵版、1933
- ②「熾仁親王日記」巻中、高松宮蔵版、1936
- ③「熾仁親王日記」巻下、高松宮蔵版、1937
- ④「熾仁親王行実」高松宮蔵版、1938
- ⑤「韶仁親王行実」高松宮蔵版、1938
- ⑥「熾仁親王行実」高松宮蔵版、1938
- ⑦「有栖川宮総記」高松宮蔵版、1940
- ⑧大崎定一「こんぴら信仰史…三話」『こと比ら』19号、pp.47-48、1964
- ⑨土居次義「讃岐金刀比羅宮の障壁画」マリア書房、1974
- ⑩松原秀明撰「金毘羅庶民信仰資料集 年表篇」金刀比羅宮社務所、1988
- ⑪「企画展 岸派とその系譜—岸駒から岸竹堂へ—」栗東歴史民俗博物館、1996
- ⑫佐々木丞平「岸駒の生涯と芸術」(同書所収論文)
- ⑬「町史ことひら 3 近世・近代・現代 通史篇」琴平町、1998
- ⑭西牟田崇生「黎明期の金刀比羅宮と琴陵宥常」国書刊行会、2004
- ⑮伊藤大輔「常若の絵画—金刀比羅宮の障壁画」『金刀比羅宮の名宝—絵画』金刀比羅宮、2004
- ⑯「特別展 京都画壇岸派の展開」教賀市立博物館、2005
- ⑰「特別展 遺された絵—岸駒・岸岱・岸派絵画資料をめぐって—」富山市佐藤記念美術館、2012
- ⑱五十嵐公一「安政の御所造営と文久の修陵」『天皇の美術史 5 朝廷権威の復興と京都画壇 江戸時代後期』吉川弘文館、2017